

小学校社会科における学習状況を可視化した模擬議会が 政治的関心に与える効果に関する事例的研究

新井 堅登 (上越教育大学教職大学院)

榊原 範久 (上越教育大学教職大学院)

【要 約】

本研究では、タブレットの記述画面のスクリーンショットを集約し、全ての記録を学習者同士が自由に相互閲覧することができるアプリケーション (edulog) を用いて、模擬議会の準備から議会の実践を行うまでの学習状況を可視化した模擬議会の実践モデルを開発・実践した。その実践に学習者が取り組む過程を分析し、学習者の政治的関心に与える効果について検証した。その結果、学習者が他者の意見を参考にしながら、学習者自身で資料作成を行うことにつながり、政治的関心の向上に影響を与えることが示唆された。また、質問紙調査の結果から「政治情報に対する関心」の向上が見られた。これらのことから、本実践は、政治的関心を高めるモデルとして実践の有効性が示唆された。

【キーワード】

模擬議会, 小学校社会科, 可視化, edulog, 主権者教育

I 問題の所在

2015年の公職選挙法改正により選挙権を有する者の年齢が満18歳以上に引き下げられた。そして、文部科学省(2016)¹⁾は「具体的な実践・体験活動を学校、家庭、地域など社会全体で主権者教育を推進する」として近年、さらに主権者教育が重要視されるようになった。

主権者教育とは「他者と連携・協働しながら、社会を生き抜く力や地域の課題解決を社会の構成員のひとつとして主体的に担うことができる力を身につけさせる」教育である(文部科学省, 2016)²⁾。

2017年12月の第48回衆議院議員総選挙において全体の投票率が53.68%だったのに比べ、18~19歳の投票率は40.49%であり、約13ポイント低くなっている。総務省(2017)³⁾が行った調査によると、「政治関心度」では、「非常に関心を持っている」と「多少は関心を持っている」を合わせると、全年代合計は78.5%に上るのに対し、18, 19歳は44.1%と30ポイント以上低い値を示している。桑原(2016)⁴⁾

は、主権者教育の目指すものとして「社会や政治に関心を持ち、そこで生じている出来事や問題について考え、積極的に社会に関わり行動しようとする市民を育てることではないか。」と述べており、政治的関心の向上が必要とされている。

また、松野ら(2018)⁵⁾は「具体的政治事象で実践的な学びを小学校段階でも取り入れていく必要がある」と述べている。このことから、小学校段階から政治的関心を高める主権者教育を行う必要があると考えられる。

一方、文部科学省・総務省(2015)⁶⁾は、主権者教育の推進に向けて『私たちが拓く日本の未来』を全国の高校生に向けて配布した。ここでは、実践例として模擬投票、模擬議会、模擬請願などの体験的学習が挙げられている。山本(2017)⁷⁾は、体験的学習の経験が早期の政治的関心の形成に影響を与えることを明らかにしたが、実証的な研究の蓄積の必要性を述べている。横大道ら(2014)⁸⁾は、模擬議会を「初等教育においても十分に活用しうるもの」として小学校段階においても模擬議

会の有用性を示唆している。模擬議会とは「議会における法律までの法案の審議過程を体験する学習プログラム」である（文部科学省・総務省，2015）⁹⁾。

しかし、横大道ら（2014）¹⁰⁾は模擬議会を実施する例は多くないと述べている。また、岡田ら（2015）¹¹⁾は、大学生を対象に模擬議会を行ったが、その課題として、「法案の理解に乏しいまま質疑が行われてしまう」ことを挙げ、模擬議会の実践の難しさを示している。そこで、議論の質的向上を目指す改善策として、模擬議会を行うまでの学習状況を可視化することの効果の可能性を述べているが実践はされていない。さらに、榎原ら（2017）¹²⁾はディベートにおいて学習状況を可視化することで、ディベートに参加する聞き手の学習意欲が向上することを報告している。この研究を参考にすると、学習状況の可視化が政治的関心の向上にも効果の可能性が示唆される。

よって、これらの先行研究から、学習状況を可視化する方法を取り入れ、小学校段階から政治的関心を高める模擬議会の実践モデルを開発することは、重要な課題であると考ええる。

II 研究の目的と定義

1. 研究の目的

小学校社会科（公民分野）において、学習状況を可視化した学習環境を取り入れた模擬議会の実践モデルを開発・実践することで、学習者の政治的関心に与える効果について明らかにする。

2. 可視化の定義

可視化の研究は理工学や医学、教育学など様々な分野で多岐に渡っている。本研究においては、「学習状況の可視化」という観点で可視化を定義している点から、本研究の可視化の目的と類似している榎原ら（2017）¹³⁾、中原ら（2002）¹⁴⁾を参考にした。よって可視化を「大量の情報の中から必要な情報を分かりやすく提示し、授業者や学習者が直感的に分かりやすく、情報を獲得できるようにすること」と定義した。

3. 政治的関心の定義

本研究において、政治的関心の定義は、原田（2001）¹⁵⁾、唐木（2016）¹⁶⁾、井田（2009）¹⁷⁾を参考に、

①政治的な問題に対して自らの生活や他の立場の人々に目を向けようとする関心や態度、②政治的な問題や情報を多面的・多角的に考察・判断しようとする関心や態度とする。

III 研究方法と調査方法

1. 学習状況の可視化の方法

鈴木ら（2014）¹⁸⁾はICT機器を用いることにより、グループ活動の内容を共有、可視化できることを報告している。そこで、大島ら（2017）¹⁹⁾が開発したedulogを使用する。edulogとは、タブレット上で「データを一元化して記録し、それを集約し一覧化することができるアプリケーションである。」使用した機能は以下の通りである（図1）。

機能① ホワイトボード機能

自分の意見を書き込むことができる。資料の上からも書き込むことができる機能。また、文字の色も変えることができる。

機能② 画像提示機能

資料を画面に提示する機能。

機能③ 画像の保存機能

現在の画面を保存し、画像データとして蓄積する機能。保存したデータを一覧表示することができる（図2）。

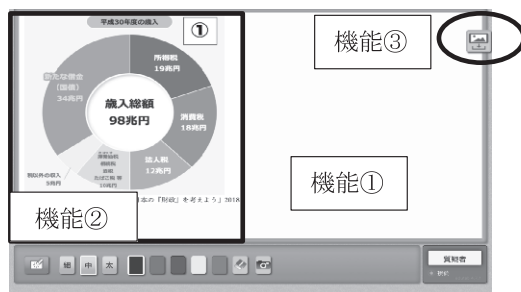


図1 edulogのタブレット画面



図2 edulogの一覧表示画面

これらの機能を用いることで、それぞれの役割に分かれて作業を行う際に、自分とは異なる班の意見を可視化することができる。よって本研究の目的と適合していると判断し、edulogを活用した。

2. 調査方法

(1) 模擬議会モデルの開発

『私たちが拓く日本の未来』を参考に小学生を対象とした模擬議会モデルを作成した。表1に開発した授業モデルを示す。

本研究では、『『実社会における公共的な課題であること』に加え、『生徒に身近で、時事的であり、争点性を含むもの』』（文部科学省・総務省、2015）²⁰⁾ という内容を考慮し議案を選定した。このことから、実施した小学校の自治体にも取り上げられていた「給食費を無償化にするべきか」という議案で模擬議会を行った。

表1 授業展開

時	学習内容	分
1~4	①基本的知識に関する学習	45
	①質問紙調査（事前）	5
	②テーマの把握	10
5	③自分の現在の立場を考え、意見交流を行う（考えたことをedulogに載せる）	15
	④それぞれの役割の説明	10
	⑤振り返り用紙記入	5
	①学習問題の把握	5
	②政党分け、役割分け	5
6	③それぞれの役割で準備を行う（学習状況をedulogを用いて可視化）	30
	④振り返り用紙記入	5
	①学習問題の把握	5
	②役割毎で調べた内容をedulogを用いて可視化する	15
7	③与・野党分かれて委員会採決シナリオを作成する	20
	④振り返り用紙記入	5
	①委員会の流れを説明	5
8	②模擬委員会採決（edulogを使用しながら討論）	20
	③本議会シナリオを作成する	15
	④振り返り用紙記入	5
	①本議会の流れを説明	5
	②模擬本議会採決（edulogを使用しながら討論）	15
9	③振り返り活動	20
	④質問紙調査（事後）	5

①提示した資料

議論の焦点化を図るために教師から資料を提示

した。提示した資料は以下の通りである。

1. 平成30年度の歳入総額とその内訳
2. 平成30年度の歳出総額とその内訳
3. 平成30年度の給食実施率
4. 平成27年度の人口ピラミッド図
5. 年間1人あたりの学校に通うための費用
6. 学校給食費の未納額割合の推移

これらの資料については、中学校社会科免許を所持する現場経験15年以上の大学教員1名と、中学校社会科免許を持つ教職大学院生3名と協議を行い、賛成と反対のどちらにも考えることができる資料として判断し、決定した。

②模擬議会での役割

模擬議会において、設定した役割は以下の通りである。

与党①：応答者（4名）

委員会で野党からの質問に対して答える役割。

与党②：賛成討論者（3名）

賛成の立場から、根拠を基に討論を行う役割。

与党③：趣旨説明者（3名）

議案の提出理由とその内容を説明する役割。

野党①：質疑者（4名）

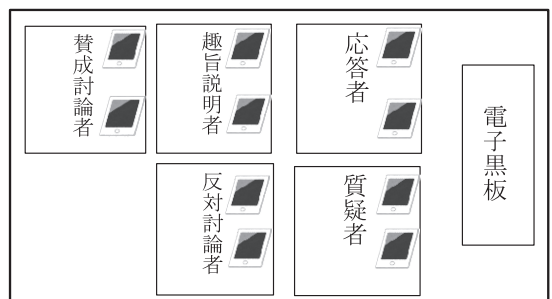
委員会で与党に対し質問する役割。

野党②：反対討論者（3名）

反対の立場から、根拠を基に討論を行う役割。

③各時間における教室配置

各時間における教室配置図をそれぞれ図3、次頁図4、5に示す。第5時では、学習者1人に1台タブレットを配布し、第6～9時では、各役割にタブレットを2台ずつ配布した。電子黒板には、各役割が記録したedulogの画面を投影した。実際の模擬議会の様子を次頁図6、7、8に示す。



※ …タブレット

図3 第6、7時の教室配置図

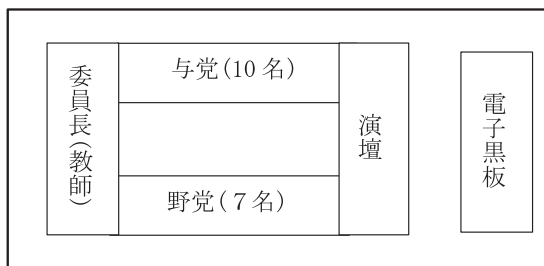


図4 第8時(模擬委員会)での教室配置図



図8 模擬本議会の様子

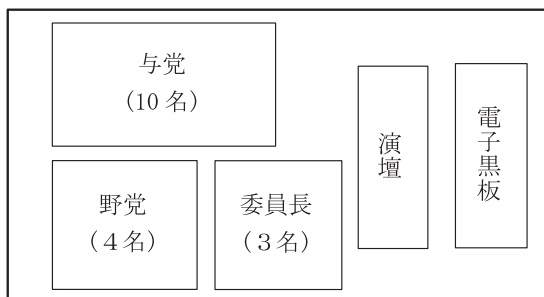


図5 第9時(模擬議会)での教室配置図



図6 edulogを活用して意見を考える様子



図7 模擬委員会の様子

(2) 調査の概要

①調査対象と単元

学習者：新潟県公立小学校 第6学年17名
 単元：わたしたちの暮らしを支える政治
 (全9時間)

②使用機器

- ・デジタルビデオカメラ (2台)
- ・ICレコーダー (学習者各1台)
- ・edutab box (1台)・Access point (1台)
- ・タブレット (iPad…教師・学習者各1台)
- ・電子黒板 (1台)

③記録方法

ビデオカメラ2台を教室の前後対角線上に設置し、授業の様子を記録した。また、ICレコーダーを学習者全員に装着し、授業中の発話を記録した。

④分析方法

分析1 edulogの記述分析

第6時において準備期間(表1 - 第6時, ③)で学習者がedulogに記録した意見を佐藤ら(1991)²¹⁾の研究を参考に本研究では、内容ごとのまとまりで区切り、1枚のedulogの記録として、政治的関心の定義を基に、2つの項目に分けて分析を行った。

政治的関心の表出の定義を基に項目を作成し表出が見られたものと、その他、に分け分類を行った(次頁表2)。作成する際は、中学校社会科免許を所持する現場経験15年以上の大学教員1名と、中学校社会科免許を持つ教職大学院生3名と協議を行い、作成した。分類にあたっては、2名の分析者が、作成したカテゴリーに従って分類を行い、最後に分析者の分類結果をつきあわせて、一致率を算出する方法を取った。なお、2名とも中学校社会科免許を所持する学卒院生で行った。分類の照合作業での一致率は88.5%であり、分類が異

なった箇所は協議して判断した。分類を行った edulog のデータ数は全部で23個である。白紙、資料のみの記録、間違えて記録したと考えられる全く同じ内容の記述は無効とした。

また、同一データが両方のカテゴリーについて意見を記述した場合は、両方のカテゴリーでカウントを行った。図9は、カテゴリーの該当例である。「①高れい者が増える→②年金問題で歳出がくがふえ、むしろ化したら、さらにさいしゅつがくや③税が上がることについて④どうお考えですか？」のような場合は、①をカテゴリー1.(1)で1カウント、②をカテゴリー2.(2)で1カウント、③をカテゴリー2.(1)で1カウント、④をその他として1カウントとした。

表2 作成したカテゴリー分類

No.	カテゴリー	下位項目	該当例
1	自らの生活や他の立場の人々に向きようとする態度	(1)自らの生活に関する記述	・高齢者が増える
		(2)他者の生活に関する記述	・～%の人が楽になる
2	政治的な問題や情報を多面的・多角的に考察・判断しようとする態度	(1)税金に関する記述	・借金があるのに無償化するとさらに借金が上がる
		(2)歳入、歳出に関する記述	
-	その他		どうお考えですか？

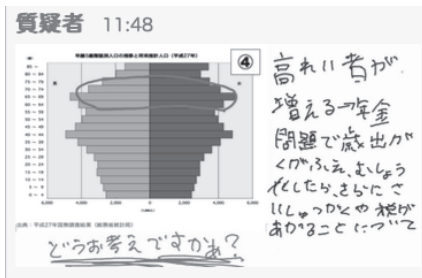


図9 edulogの記述例と該当例

分析2 学習者の授業中の発話分析

①第6時の発話分析

学習状況を可視化した環境が、学習者の政治的関心にどのような影響を与えていたか検証を行う必要があるため、それぞれの役割で準備を行った、第6時の発話分析を行った。

②第8時の発話分析

学習状況を可視化した環境が、模擬議会の討論

場面において学習者にどのような効果を与えていたかを検証するため、第8時に行われた模擬委員会の発話分析を行った。

分析3 質問紙調査による分析

実践前と実践後に、原田(2001)²²⁾の政治的関心尺度を参考に、小学生でも理解できるものに作成し記名式の質問紙調査を実施した(表3)。質問紙を作成する際は、分析1と同様の方法で行った。9項目からなる質問事項に対し、学習者の反応形式は「5:とてもよくあてはまる」から「1:まったくあてはまらない」までの5件法で調査した。

事後調査では、表3の質問項目に加えて、筆者が作成した1項目の質問を5件法で行った(表4)。

分析4 単元終末の振り返り記述分析

単元の振り返り活動(表1-第9時、②)において学習者の振り返り記述から本実践が政治的関心にどのような影響を与えたか検証を行った。

表3 質問紙項目

<p>政治問題に対する関心</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. いまの国の政治の動きについて関心が高い 3. 選挙で各党の議席がどうなるのか興味がある 4. どの党が政治を行っても自分には関係ないと思う 6. 身の回りの人と国の政治問題について話し合う機会がある 7. 政治的な問題には関わりをもたないようにしている 9. これからの国の政治のあり方に興味を持っている <p>政治情報に対する関心</p> <ol style="list-style-type: none"> 2. テレビの政党討論番組を見ようとする気は起らない 5. できるだけテレビやラジオの政治ニュースを見たり聞いたりするように心がけている 8. 短い時間であっても、新聞で政治面の記事を読むようにしている
--

表4 事後の追加質問項目

<ul style="list-style-type: none"> ・今回の模擬議会ではうまく討論をしたり、考えたりすることができた。 ・その理由を教えてください。(自由記述)

IV 結果と考察

分析1 edulogの記述分析

第6時において準備期間(表1-第6時,③)で学習者がedulogに記録したデータを分析した結果,表5のようなカテゴリーに分類することができた。カテゴリー1では,(1)他者の生活に関する記述よりも,(2)自分の生活に関する記述が多く見られた。カテゴリー2では,(1)税金に関する記述と(2)歳入,歳出に関する記述は同様の数が見られた。カテゴリー1,2に該当する記述が見られたことからedulogの記述内容に政治的関心が表出した。

表5 カテゴリー数 (n=23)

役割	カテゴリー				その他
	No.1		No.2		
下位項目	(1)	(2)	(1)	(2)	-
合計	7	3	7	7	6

しかし,この分析のみでは学習者の政治的関心の変容が捉えられるかという点については課題が残る。そこで,次の授業中の発話分析や,質問紙による分析,単元終末の感想用紙の分析によって政治的関心への効果を検証する。

分析2 学習者の授業中の発話分析

i 第6時の発話分析

ここでは,分析1において政治的関心の表出が学級全体において平均的であった質疑者のやりとりの分析を行った。活動の実施において,全体に指示したことは以下の点である。

- ・第8,9時での討論の際に活用する意見について,資料を用いて考えること。
- ・前時においてedulogに記録した意見や,他の役割の意見を見ても良い。

質疑者のやりとり(表6)は,野党の立場から質疑内容を考えている場面である。①のようにどの資料を用いて質疑を行うかグループ内で議論を行っている。

そこで,②のようにedulogを活用し,他の役割の学習者の意見を参考にしていることから,他者の意見を参考にしている様子がわかる。また,③様々な資料を吟味し判断を行っている。次頁図10は,最終的に質疑者が記録したedulogの画面で

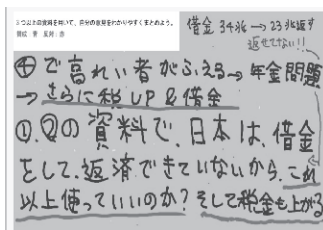
ある。

これらのことから,質疑者は学習者Cの意見や様々な資料から読み解き判断をする様子がわかる。これは政治的関心の表出の「政治的な問題や情報を多面的・多角的に考察・判断しようとする関心や態度」に当てはまる。

以上のことから,第6時の発話からは,学習状況を可視化した環境が「政治的な問題や情報を多面的・多角的に考察・判断させる関心や態度」に影響を与えていたことが示唆された。よって,発話からも政治的関心の表出が見られた。

表6 質疑者のやり取り(第6時)
(A, B, C, D, Eは学習者を示す)

- A:でもさ4(の資料)だよ。ねえ4だよ,4,4。
 B:①え,4違うよ。
 A:え,だってさこれでさ。まってまってまってedulog貸して。
 ②Cがさ,4使ってたんだよ。(Cのedulogを見て)そうそうそう。



学習者Cのedulog画面

4で高齢者が増え年金問題がさらに税がアップして借金も増える。日本は借金を返済できていないから,どうしたらいいですか。私もこれは考えた。Dも確かそうだった。じゃあ4の資料で。

- B:え?
 (6の資料を見せる)
 A:これはダメだって。③これは与党に有利な資料じゃん。
 E:与党に有利って何?
 A:だって未納…これだけ払われてないんだからさ,無償化すればってことだよ。

C…応答者 D…賛成討論者

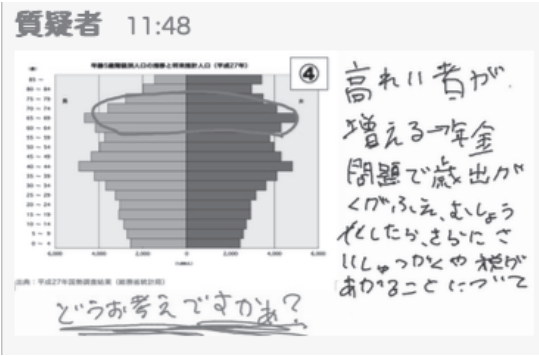


図10 質疑者が記録したedulog画面

ii 第8時の発話分析

表7は質疑者が応答者に対し、質疑を行っている場面である。質疑者は④のように意見を述べている。一方、表7の質疑者のedulog画面では、④の発話と同様のことを述べている。つまり、学習者は、発言の際にも、学習状況を常に可視化した状況を、有効的に活用し、意見を述べていたことがわかる。次に、質疑者の④の質問に対し、⑤のように応答している場面である。表7の、応答者のedulog画面であるが、こちらも質疑者と同様にedulogを基にして意見を述べていたことがわかる。その後も、質疑者から応答者に対して質疑が行われたが、⑥や⑦でもedulogを基にして発言していることが明らかになった。

これらのことから、今までの政治的関心を表出させたedulogの学習記録をもとにして、模擬委員会に意見を述べていたことが明らかになった。

また、④、⑤の発話からは政治的関心の表出の定義である「政治的な問題に対して自らの生活や他の立場の人々に目を向けようとする様子」や「政治的な問題や情報を多面的・多角的に考察・判断しようとする様子」が見られた。

以上のことから、模擬委員会の質疑・応答場面において、これまでの自分で作成した学習記録から参照し、意見を述べていたことが明らかになった。

表7 模擬委員会での質疑場面（第8時）
(Tは授業者 B, G, H, Iは学習者を示す)

T：はい。Bさん。

B：はい。

～演壇に移動～

④えっと・・・えっと借金が返し、さらに、返しきれていないのに無償化したら歳出額も上がるし税金も上がってしまうのはどうお考えですか。お応えください。



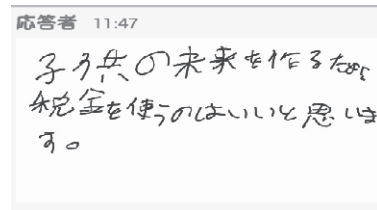
質疑者のedulog画面

T：はい。この質問に対して、えー意見のある与党の方。はい。Gさん。

G：よいしょ。

～演壇に移動～

はい。えーつとお応えいたします。⑤子供、子供の未来をつくるために税金を使うのはいいと思います。これで終わります。



応答者のedulog画面

T：はい、そのほかに質疑のある方はいますか？はい、Hさん。

～演壇に移動～

H：えっと⑥借金があるのに無償化したら②のときと同じように借金、税が上がることについてどうお考えですか。お答えください。

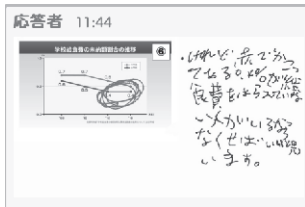


質疑者のedulog画面

T：はい、この質問に対して与党で意見のある方はいらっしゃいますか。はいIさん。

～演壇に移動～

I：えーお願いします。⑦けれど赤で囲ってある0.4%が給食費を払っていない人があるのでなくせばいいと思います。これで終わります。



質疑者のedulog画面

B, H…質疑者 G, I…応答者

分析3 質問紙調査による分析

(1) 政治的関心尺度による質問紙調査

質問紙をもとに、事前と事後の回答のそれぞれの合計得点を算出し、一要因参加者内の分散分析を行った結果、「政治情報に対する関心」が5%水準で有意に向上した(表8)。一方で、「政治問題に対する関心」については有意差が見られなかった。

「政治情報に対する関心」が高まった理由として、6つの資料や他の学習者の意見から多面的・多角的に情報を読みとき、取捨選択をし、考察・判断する学習が1つの要因であったと考えられる。「政治問題に対する関心」に統計的な高まりが見られなかった理由としては、1つの政治的事象についてしか取り扱わなかったため、政治問題に対する視野が広がらなかったことが原因として考えられる。

(2) 事後調査にて追加で調査した項目

表4の質問に対して「5：とてもよくあてはまる」と回答した学習者が11名、「4：ややあてはまる」と回答した学習者が5名、「2：あまりあてはまらない」と回答した学習者が1名であった(表9)。「うまく討論をしたり、考えることができた」の回答理由として、⑧、⑩のように他者の意見を参考にできたことを理由として挙げている。他にも、⑨のように資料を基にして根拠を示した意見作成ができたことを挙げている。

このことから、他者の意見を参考にしながら、

資料作成を行ったことが、模擬議会を行うにあたり、有効的であったと考えられる。

表8 質問紙調査の結果 (n=17)

項目	事前	事後	F
政治問題に対する関心	16.29	16.12	0.14 ns
政治情報に対する関心	10.53	11.47	4.73 *

* $p < .05$ ** $p < .01$

表9 事後調査の追加質問の結果 (n=17)

選択肢	内容
1	回答者なし
2	・わけがわからなかったから (1)
3	回答者なし
4	<ul style="list-style-type: none"> ・⑧難しかったけれど楽しくうまく協力してできたから。(他者との協働：3) ・他の人の意見を聞いて資料を作ったり、対立する人の意見を基に自分の意見を考えられたから(他者の意見活用：1) ・本当は反対だったけど、賛成側でも頑張れたから (1)
5	<ul style="list-style-type: none"> ・⑨資料を使って説得力のある意見を作れたから。(根拠を示した意見作成：4) ・⑩edulogなどをうまく活用し、自分の意見を言えたから。野党・与党の意見を聞いて納得できたから。(他者の意見活用：3) ・反対側の人みんなで言うことなどを考えたりしたから(他者との協働：2) ・代表として野党の側の意見を言うことが出来た (1) ・議員になった後が忙しくてめんどくさいことが分かった気がする (1)

※ () 内は筆者による要約文と該当人数

分析4 単元終末の振り返り記述分析

単元終末の振り返り活動(表1-第9時, ②)において学習者の振り返り記述から分析を行った結果、政治的関心の表出は見られなかったが、表10, 11のような模擬議会に対して肯定的な記述や表12のような否定的な記述が見られた。肯定的な意見記述をした学習者、否定的な意見記述をした学習者からそれぞれ無作為抽出を行った。

表10 学習者Bの振り返り記述

ぼくは、(学校名)議会をして、最初は、質疑者として、反対がわでした。自分のいけんを、前に言ったりしました。そして、本議会をして、ぼくたちは、委員長でした。⑪野党と与党の意見をきいて、最初は反対だったけど、少し賛成にも、きょうかんができました。⑫国会では、ぼくたちのやったもつとむずかしい物を、毎回やっていることがすごいと思いました。

表11 学習者Aの振り返り記述

法案を1つ決めることにも、いろいろややこしい事があり、難しいことが良くわかりました。
⑬賛成がわには、賛成の意見があるし、反対がわには反対の意見があるので、とてもむずかしいと思いました。質疑者では、資料などを上手く使って、質問することができて良かったです。⑭この授業を通して国のことを決めるのは大変だし、とても重要だということが、よく分かりました。

表12 学習者Hの振り返り記述

反対に考えるのがむずかしかったです。
 しかもぼくはそういうのをかんがえたことがないからむずかしかったです。

模擬議会を経験して、表10では⑪のような異なる立場の意見に共感を示す記述や、⑫のような実際の議会の仕組みへの理解を示す記述が見られた。表11では、⑬のような合意形成することの難しさを示す記述や、⑭のように本実践を通しての政治への理解を示す記述が見られた。一方で、表12のように、自分と異なる意見を考えることが難しいと考える記述が見られ、本実践においての難しさを感じている学習者も見られた。

以上のことから、本実践を難しいと感じる学習者もいたが、他の立場になって考えることや、政治についての理解が深まったことが示唆された。

V 結論

分析の結果、本研究では以下の4つが明らかになった。

1つ目は、分析1の結果から、学習者の記録したデータを集約し、一覧化することができるアプリケーション(edulog)の記述において政治的関心が表出されたと考えられる。2つ目は、分析2の結果から、学習状況が可視化した環境が政治的関心に影響を与えていたことが示唆され、政治的関心を表出させた記述をもとに、意見を述べていたことが明らかになった。3つ目は、分析3の結果から、質問紙調査によって、「政治情報に対する関心」の項目が向上したことが示唆された。また、他者の意見を参考にしながら、資料作成を行うことが、模擬議会を行うにあたり、有効的であることが考えられる。4つ目は、分析4の結果から、振り返り記述からは政治的関心の表出は見られなかったが、本実践モデルは政治についての理解を深める実践であったことが示唆された。

これらの結果から、単元の学習過程において学習状況を可視化した環境を設定して行った本実践モデルは、小学校段階においても実践可能であり、政治的関心を向上させる実践として有効性が示唆された。

VI 課題

本研究では、誰がどのように学習記録を参照していたのかを明らかにすることができなかった。そのため、タブレットの操作ログの収集機能を用いるなどして、誰がどの画面を何回参照したことが明らかになるシステムを開発する必要がある。

また、誤った情報や読み取りをした場合にも学習記録として残ってしまう。これを参照した学習者は誤った情報を得てしまうことがある。そのため、情報を発信する側は、批判的に考察し資料を作成する必要がある。情報を読み取る側は、批判的に資料を読み取る力を養っていく必要があると考える。

謝辞

本研究はJSPS科研費JP19K14231の助成を受けたものです。

【引用文献】

- 1) 文部科学省：『主権者教育の推進に関する検討チーム最終まとめ～主権者として求められる力を育むために』, http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/ikusei/1372381.htm, 2016 (閲覧日2020.5.27).
- 2) 前掲書1)
- 3) 総務省：「国政選挙の年代別投票率の推移について」, http://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo_s/news/sonota/nendaibetu, 2017 (閲覧日2020.5.27).
- 4) 桑原敏典：「まちづくりを通して学ぶ主権者教育プログラムの開発－ワークショップを取り入れた参加型学習の実践を通して－」, 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, Vol.163, pp.49-58, 岡山大学, 2016.
- 5) 松野実・沖西啓子・二階堂年恵：「主権者意識の基礎を育成する小学校社会科授業の開発と実践」, 子ども学論集, Vol.4, pp.11-26, 広島文化学園大学大学院教育学研究科, 2018.
- 6) 文部科学省・総務省：「私たちが拓く日本の未来活用のための指導資料」, http://www.soumu.go.jp/main_content/000382033.pdf, 2015 (閲覧日2020.5.27).
- 7) 山本英弘：「政治的社会科研究からみた主権者教育」, 山形大学紀要(教育科学), Vol.16(4), pp.21-40, 山形大学, 2017.
- 8) 横大道聡・岡田順太・岩切大地・大林啓吾・手塚崇聡：「模擬国会の教育的意義：初等・中等教育における実践を中心に」, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, Vol.23, pp.1-29, 鹿児島大学, 2014.
- 9) 前掲書6)
- 10) 前掲書8), pp.1-29.
- 11) 岡田順太・横大道聡：「資料：法学教育における能動的学修プログラムの開発-模擬国会を用いた臨床法学教育の試み-」, 白鵬大学法政策研究所年報, Vol.8, pp.23-84, 白鵬大学, 2015.
- 12) 榊原範久・松澤健彦・水落芳明・八代一浩・水越一貴：「タブレット型端末を利用した同期型CSCLによる思考の可視化がディベートに参加する聞き手の学習意欲に与える効果に関する研究」, 科学教育研究, Vol.41(2), pp.85-95, 日本科学教育学会, 2017.
- 13) 前掲書12), pp.85-95.
- 14) 中原淳・前迫孝憲・永岡慶三：「CSCLのシステムデザイン課題に関する一検討：認知科学におけるデザイン実験アプローチに向けて」, 日本教育工学会論文誌, Vol.25(4), pp.259-267, 日本教育工学会, 2002.
- 15) 原田唯司：「大学生の政治不信－政治的関心, 政治的知識および政治の有効性感覚との関連－」, 日本教育心理学会総会発表論文集, Vol.43, p.259, 日本教育心理学会, 2001.
- 16) 唐木清志編：「『公民的資質』とは何か－社会科の過去・現在・未来を探る－」, 東洋館出版社, pp.96-105, 2016.
- 17) 井田正道：「大学生の政治観に関する分析」, Informatics, Vol.2(2), pp.17-28, 明治大学, 2009.
- 18) 鈴木栄幸・舟生日出男・久保田善彦：「個人活動とグループ活動間の往復を可能にするタブレット型思考支援ツールの開発」, 日本教育工学論文誌, Vol.38(3), pp.225-240, 日本教育工学会, 2014.
- 19) 大島崇行・水落芳明・榊原範久・八代一浩・水越一貴：「アクティブ・ラーニングにおける授業観察視点に関する研究－複数の観察結果共有を通して－」, 科学教育研究, Vol.41(2), pp.193-203, 日本科学教育学会, 2017.
- 20) 前掲書6)
- 21) 佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美：「教師の実践的思考様式に関する研究(1)－熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に－」, 東京大学教育学部紀要, Vol.30, pp.177-198, 東京大学, 1991.
- 22) 前掲書15) p.259.